

原 著 論 文

歪像の文法 — フランスの頭蓋変形慣行に関する歴史人類学的研究 —

蔵 持 不三也^a

Grammar of Anamorphosis Historical Anthropology of Skull Deformation Tradition in France

Fumiya Kuramochi^a

(^aFaculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : March 18, 2015 ; Accepted : June 23, 2015)

Summary

In traditional French society, there was a sort of barbarous custom which existed formerly in ancient Egypt and pre-Columbian South-America. Called in French as “déformation toulousaine” or “crâne toulousaine” (nemed by Paul Broca, French physical anthropologist), this custom composed of a deformation of the newborn’s skull by the hands of the midwife with a band or splint after childbirth. According to one theory, this cranial deformation began during the Merovingian period. In spite of repeated criticism by many physicians and intellectuals insisting on its abolition, it survived to the 20th century. Why? Paying attention to such continuation of the barbarous custom, this paper aims to reconsider its meaning and role from the angle of the history anthropology, and make clear the relation between the Imaginaire (collective imagination) and the popular culture.

はじめに

マリ・ソフィー・ジェルマン (Marie Sophie Germain, 1776-1831) といえ、 $2p+1$ が素数であるような素数 p について、 $x^p + y^p = z^p$ が成り立つとき、 x, y, z のいずれかが p で割り切らねばならない」という定理や弾性体の振動研究、さらにはオーギュスト・アントワーヌ・ルブランの偽名を用いてのカール・フリードリヒ・ガウスとの往復書簡などで知られる、フランスの女性数学者である。生地のパリのみならず、フランス各地に彼女の名を冠したりセ (国立高等学校) や通りがあるほど有名な彼女には、じつは公然たる秘密があった。図1から明らかなように、彼女の頭骨が異様に長い、こう

いってよければ、その後頭部がさながら旧石器時代人のように突き出ているのである。フランス形質人



図1 数学者ソフィー・ジェルマンの頭骨 (複製)、
パリ自然史博物館蔵 (蔵持撮影)

^a 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

類学の世界では、いわば常識化している話であり、ソフィー自身も認めていることだが、彼女のこの頭骨は自然の形質ではなく、じつは幼児期になされた人為的な変形操作の結果なのである。

パリの国立自然史博物館（古生物学研究所）には、同様の変形頭骨が数多く収蔵されているが、そのなかにトゥールーズ慈善院の外科医レスゲの頭骨もある（図2）。生没年は不明だが、後出のポール・ブロカとも交流のあった彼は、自らの頭骨を、この慣行の実例資料として、死後、自分の頭骨を博物館に遺贈した。

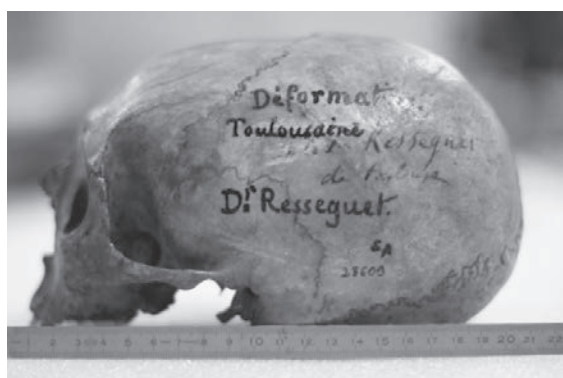


図2 外科医レスゲの頭骨（前同）

古代エジプトやオセアニア、さらに南米やアフリカの一部部族社会で広く行われてきたこうした幼児期における頭蓋変形は、ヒトラーの第3帝国における優生学的優越性の象徴としての長頭＝北方種偏重と、そのための幼児頭骨変形——説に記憶力拡大のため——という特殊な慣行を別にして、20世紀初頭までヨーロッパ各地にみられた。はたしてそれはいかなる意図によるものか。本稿はその社会的・象徴的な意味と示標性を、とくにフランスの事例から歴史人類学的に追究するものである。

1. ヨーロッパにおける頭骨変形慣行とその「伝播」

アメリカ大陸の慣行を留保していえば、近年の考古学調査は、一連の頭蓋変形をプロト新石器時代から新石器時代（前9000－前6000年頃）の近東で始まったとしている⁽¹⁾。西アジア最古（前1万年頃）とされる土器が出土したイランのガンジ・ダレ・テベ遺跡や、ネアンデルタール人骨の出土地としても知られるイラクのシャニダール洞窟遺跡などから出土した頭骨に、それがみられるからである。だが、改

めて指摘するまでもなく、その変形がはたしていかなる目的でなされたのかは不明とするほかはない⁽²⁾。おそらく前5－前4世紀の医聖ヒポクラテスが編んだとされる『古い医術について』は、ヨーロッパにおける頭骨変形とその目的ないし意図に関する初期の言及と思われるが、そこで彼は「長頭族」についてこう記している⁽³⁾。

その長頭の原因は、最初はおっぱい習慣であったけれども、現在では習慣を生まれつきが助長している。というのはもっとも頭の長いものももっとも高貴なものだと考えられているのである。（・・・）子供が生まれるとすぐ、まだ体がしなやかで頭が軟らかなうちに、手でもって形をととのえ、繃帯を巻いたり適当な装置を施したりして、長形に成長するように強いる。これによって頭の球形はそこなわれ、長形へ成長するのである。

この一文に続けて、ヒポクラテスはこうした慣行も人々が交流するようになって衰えたとしているが、彼によれば、すくなくとも「交流」が行われるようになるまで、おそらく前5世紀までは変形頭蓋の長頭が高貴さと結びついていたという。さらに前1世紀に編まれたストラボンの『地理書』には、コーカサス地方のシギンノイ族が、「部族によつては、頭ができるだけ長く見えるようにすることを日課とし、そのためには額を前に引張って顔から迫り出すまでにしてしまうものがある」とある⁽⁴⁾。

むろん、こうした一連の古典的著述はあくまでも伝聞に属しており、そのかぎりにおいてどこまで歴史的な証言たりうるかは不明である。より確実な考古学の発掘事例からすれば、ドナウ川中流域、すなわちボヘミア地方北西部と中部の墓壙で出土した初期メロヴィング朝、すなわち4世紀末から5世紀初頭の遺骸に、明らかに人為的に施された変形頭蓋がみられる。おそらくそれはフン族やゴート人、アラウニ族などの民族移動と関連しているという⁽⁵⁾。つまり、彼らが西漸の過程で頭蓋変形の文化をもたらしたというのである。同様の事例は、オーストリア南東部ライプニッツ地方のフラウエンベルクにある墓地でも確認されている。ここでは5世紀後葉の埋葬遺骸400体のうち、50歳前後の成人1体と2歳

から10歳までの子供4体に頭蓋変形が施されていた⁽⁶⁾。フランスでも、たとえばアルザス地方北部、アルザス全域の守護聖人としてなおも信仰を集める、聖女オディルゆかりのサント＝オディル修道院の麓に位置するオベルネ遺跡でも、頭骨が意図的に変形されたメロヴィング朝時代の遺骸がみつかっており(図3)、これもまた同地に移住したフン族の遺習だという⁽⁷⁾。



図3 オベルネの変形頭骨(撮影Denis Gliksman, INRA)

フン族がいかなる歴史を生きたかについては、トマス・クロウエルの『図説蛮族の歴史』⁽⁸⁾に詳しいが、この慣行をおそらくはじめて彼らと結びつけた歴史家のアメデ・ティエリは、次のように指摘している⁽⁹⁾。

フン族は子供たちにモンゴル人的な容貌を与えるために人為的な方法を用いていた。すなわち、【顔面を広くして敵に恐怖心を抱かせるため】亜麻製の帯で鼻をきつく縛って平らにし、頬骨を大きくするように頭部を形作っていたのである。

だが、脳の運動性言語中枢、すなわちブローカ野の研究でも知られる、パリ大学外科生理学教授ポール・ピエール・プロカ(1824-80)は、フランスにおける頭骨変形慣行の起源をフン族以前、すなわちケルト系ないしユトランド半島のゲルマン系のキンブリ人を出自とし、前2世紀末から前1世紀頃にかけてガリアに來住したキムリス族(命名は前記ティエリによる)に求めているという⁽¹⁰⁾。

たしかに、西シベリアのオムスクなど、ユーラシア大陸北部各地で出土したフン族の頭骨には、明らかに人為的な変形が認められる。しかしながら、このフン族の遺習が西ヨーロッパに受け入れられたと

する通説は問題なしとしない。こうした異文化を受け入れるにあたって、いかなる積極的な要因があったのか不明だからである。加えて、フランス、たとえば西部のヴァンデ地方では、すでにメロヴィング朝以前のガロ＝ロマン遺跡から、意図的に変形された頭骨が複数みつかるものがある⁽¹¹⁾。

ただ、これらの断片的な出土資料から、頭蓋変形がどこまで一般化していたのかどうか、つまり集団的な慣行なのか、それとも集団の一部が限定的に実践していただけなのか、それを判断するのは難しい。事実、フランス中央科学センターの先史学者ブリュノ・モーレイユらは、ブルゴーニュ地方サン＝テティエンヌの墓地から出土した、5世紀から6世紀にかけて埋葬女性4人の人工変形頭蓋を詳細に分析したあとで、次のように結論づけている⁽¹²⁾。

人為的に変形された頭蓋があったとしても、それだけではこれらの頭蓋が特有の文化に属していたと断言することはできない。しかし、特殊な埋葬様式や副葬品と結びついたそれらは、ブルグント族の大規模な活動があったことを示している。

今日、ブルゴーニュ地方にその名を残すブルグント族は、スカンディナヴィア半島から南下したゲルマン系民族で、493年、のちに列聖されるその王女クロティルダが、フランク国王のクロヴィスと結婚して、夫王をカトリック信仰へと改宗させたことで知られる。はたしてこの埋葬女性たちが互いにどのような関係にあったかは不明だが、モーレイユが指摘するように、これだけの資料からブルグント族が広く頭蓋変形を行っていたと断ずることはできない。ただ、フランスの地において、メロヴィング朝時代にすでにこうした人為的な頭蓋変形がみられたという事実は否定しがたい。

次図は考古学者のエリック・クリュベジの論考「フランス南西部におけるメロヴィング朝時代の頭蓋変形」に収載された、1世紀から8世紀、つまりメロヴィング朝末期にかけての変形頭蓋が出土した墓地遺跡をもとに、筆者が作成したものである⁽¹³⁾。

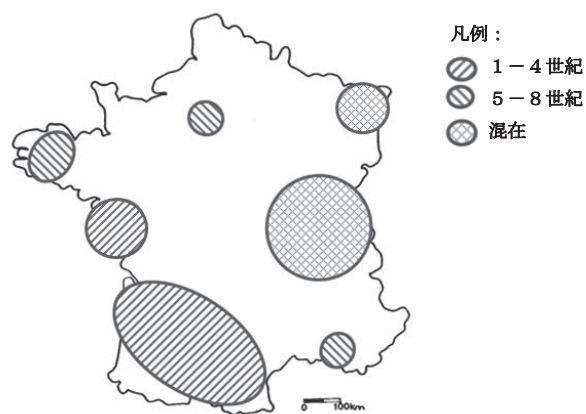


図4 1-8世紀の変形頭蓋出土地
 (原図CRUBÉZY、蔵持加筆修正)

この分布図からは、頭蓋変形が古くはトゥールーズ周辺を含むフランス南西部と中西部で始まり、後代には中央山地を越えて、パリ近郊や南仏のマルセイユのほかに、とくに中東部を中心にそれが行われていたことが読み取れる。ただ、はたしてこの時代差が伝播によるものかどうかは不明である。いずれにせよ、やがて中世も中期を過ぎる頃から、頭蓋変形は中央山地を含むフランスのほぼ全土で——地域的な濃淡はあるものの——徐々に行われるようになる。

2. 中世フランスの頭骨変形

フランス・ピレネー山脈の小村モンセギュールといえば、中世を代表する異端カタリ派が、1244年、アルビジョワ十字軍を相手に絶望的な抵抗戦を繰り広げた地として知られるが、前記クリュベジによれば、この村では9世紀から12世紀にかけて頭蓋変形が行われていたという⁽¹⁴⁾。だが、中世フランスにおけるこの慣行に関する言及は、瞥見する限り、きわめて少ない。それゆえ、ここで多くを言うことは控えなければならないだろうが、そのなかでは、おそらく13世紀のイタリア人内科医で、シャンパーニュ地方のトロワで医業を営んでいたシエナのアルデブランダン（1296年頃没）が、1256年に編んだ『医書』（*Livre de Phisike*）——のちの筆写者が『養生書』（*Régime du corps*）と改題⁽¹⁵⁾——の言及を嚆矢とする。パリ大学やモンペリエ大学の医学部とならんで、中世3大医学部に数えられるイタリアのサレルノ大学医学部で教壇に立ったこともあるモンペリエの内科医で、救貧治療の創始者とさ

れるアルノー・ド・ヴィルヌーヴ（1245-1310頃）が翻訳・注釈した、有名な『サレルノ衛生指南書』⁽¹⁶⁾より数十年前に出されたこの古フランス語で書かれた書の内容は、身体部位の養生法や疾病の予防・治療法、173通りもの食物の特性、食餌法、育児法など多岐にわたるが、そこには頭蓋変形の意味についてこう記されている⁽¹⁷⁾。

（乳児を）きちんとした形姿にするのは、賢明な乳母が行う重要な役目であり、頭が柔らかいうちに望ましい形にこれを行えば、子供はその乳母が与えた形姿をとるようになる。それゆえ、子供の美醜はまさに乳母にかかっているといってよい。

さらにこの『養生書』は、乳児の腕と手を足に縛り付け、顔を（布で）覆い、体より高くして揺り籠に寝かせるといった育児法を勧めているが、ここで興味深いのは、助産師や家族ではなく、乳母が乳児の頭骨変形を託されていたという点である⁽¹⁸⁾。これに対し、おそらく本格的な変形頭骨の最初期の研究者だった医師ルイ＝アンドレ・ゴス（1791-1873）は、『人為的な頭骨変形に関する試論』において、ヴェローナ出身のジュール・セザール・スカリジェ（1484-1558）が著した、『テオフラストゥス注解』の次のような言葉を紹介している。「ジェノヴァ人たちは頭部の変形習俗をムーア人から受け継いだ」⁽¹⁹⁾。年代（編年）学の創唱者として知られる、ジョゼフ・ジュスト・スカリジェ（1540-1609）の父で、あのノストラダムスとも親交があったこの碩学が、はたしていかなるコンテキストでこの指摘を行ったのかは不明である。ただ、当時、強大な海洋国家として地中海交易を席卷し、コルシカ島などを領有していたジェノヴァの人々⁽²⁰⁾が、被制圧民であるイスラーム教のムーア人の風習をとりいれたという説は、にわかには信じがたい。

一方、フランス先史学に巨歩を印したマルセイユ出身のエミール・カルタイヤック（1845-1921）は、トゥールーズ周辺の発掘結果から、フランスの頭骨変形慣行は13世紀にはなかったとしている⁽²¹⁾。彼は1879年にアマチュア考古学者のマルセリーノ・デ・サウトウオラ侯爵が、自分の領地で娘とともに発見したアルタミラの洞窟壁画を先史時代のものと認めず、後代の単なる「悪戯描き」と断じている。だが、

のちにドルドーニュ地方などで次々と同様の壁画洞窟が見つかり、ついにその正当性が認められるにおよんで、彼は自らの過ちを『懷疑論者の罪状告白』（1902年）で悔い、やがてブルイユ神父らとともに洞窟壁画の研究へと向かう。歴史を語る営みにおいて、「ある」というのはたやすく、「ない」と断ずるのは不可能に近い。頭蓋変形についても、彼はこの歴史の陥穽にはまってしまったのだ。

カルタイヤックの学問的な功罪はさておき、彼の説を紹介したデスリルは、トゥールーズにある15世紀から16世紀にかけての古い墓地から出土した人工変形頭蓋を数点所有しているというが⁽²²⁾、ここでその年代を特定するのは不可能である。いずれにせよ、フランスでいつ頭蓋変形が始まったのかは、後述するような例外を除いて、今のところメロヴィング朝時代とするほかない。

3. 近代以降におけるフランスの頭蓋変形

世界的にみて、変形頭蓋の研究は19世紀中葉以降に本格化している。フランスにおいてその指導的立場にいたひとりが、前出のブロカである⁽²³⁾。彼は人体測定法を確立し、それが民族性の優劣基準に用いられたり、自らの人種差別的な発言も手伝ってラシストとして指弾を浴びたりしている。また、1848年には自らが立ち上げた自由思想学会がダーウィンの自然淘汰説を評価して、当局から青少年に唯物論的な悪影響を与えるとして告発すらされている。だが、1859年にはパリ人類学会（Société d'Anthropologie de Paris）を創設し、72年にはその学会誌《Revue d'Anthropologie》を創刊し、さらに76年にはパリ人類学学校も設立してもいる。

こうしてフランス形質人類学の確立に重要な役割を果たした彼は、1871年学会誌《パリ人類学雑誌》において、有名な論考を発表する。「頭骨のトゥールーズ的変形について」がそれである⁽²⁴⁾。この論考は同年8月17日の学会講演を再録したものだが、その冒頭、彼は人類学会の資料館に自ら提供したトゥールーズ生まれの老女の頭部と脳の復元模型について触れている。それによれば、数ヶ月前にパリのピティエ病院において74歳で病没した1797年生まれこの女性——ブロカの命名で「トゥールーズヌ（トゥールーズ女性）」——は、当時としてはほぼ平均的だという身長1.53メートル。加齢によって

脳が多少萎縮しているものの、脳回（大脳皮質の「皺」の隆起部位）は通常だとしている。だが、図5から明らかなように、その頭蓋は幼い頃にヘアバンドと添え木によって前後に長く変形されていた⁽²⁵⁾。ブロカはこの頭蓋を典型とする変形を「トゥールーズ型頭骨 (cr. ne toulousaine)」ないし「トゥールーズ型変形 (déformation toulousaine)」と命名している。

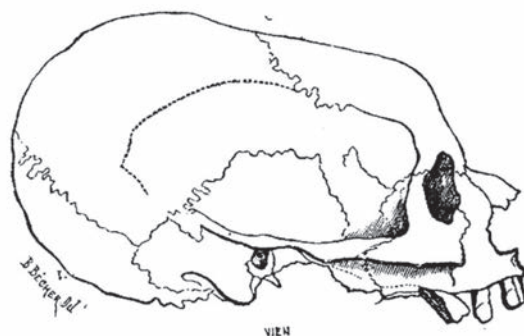


図5 トゥールーズヌの変形頭蓋 (BROCA, p. 116)

同様の変形はフランス各地、すなわち南西部のトゥールーズを県庁所在地とするオート＝ガロンヌ県のほかに、オード県や中西部のドゥー＝セーヴル県やセーヌ北仏のセーヌ＝アンフェリウール（現セーヌ＝マリティム）県でも行われており、さらに一般にこうした変形は男性より女性に多く施されているとしたうえで、変形の特徴を次のように指摘する⁽²⁶⁾。

極端な場合、前頭骨部位の陥没が眉弓のすぐ上から始まる。顔面自体も影響を受けて多少とも突顎となり、それが門歯まで及んでいる。だが、いったいに眼窩・上顎部位は通常である。額は眉のすぐ上まで4、5センチメートル垂直に立ち上がり、それから急激に傾いて平らな面をつくり、これが頭頂部まで再び斜めに上っている。この頭頂部はかなり後退しており、通常、冠状縫合（前頭骨と頭頂骨のあいだにある繊維性結合組織）から指数本分後ろに位置している。それゆえ前頭葉はかなり縮減しているが、一方、頭蓋の後ろ半分は多少とも長くなっている。

「極端な場合」と断っていることから分かるように、こうした頭蓋変形にはさまざまなパターンが

ある。ここでその詳細を明示する紙幅はないが、いずれの場合でも、この変形によって脳を含む頭蓋各部の容積が縮減し、「知能」に悪影響を及ぼすとしている。それゆえ、トゥールーズの精神科医たちは変形頭蓋の患者たちがかなりの数にのぼっているところから、子供の頭骨や頭脳の働きを害する変形と添え木の使用をやめるよう、一種の「十字軍」的活動をしていたという⁽²⁷⁾。むろん、そうした運動がどこまで功を奏したかは不明である。プロカ自身もそれについて言及していない。

一方、デリスルは1889年12月のパリ人類学会で、フランス南西部ドゥー＝セーヴレ県における頭蓋変形に関する発表をしている。彼は同県の県庁所在地であるニオーの精神科病院に入院していた女性患者100人あまりの頭骨を調べ、そのうち33人が人為的な変形を受けていたとしている。これに対し、頭蓋変形の男性患者は約70人のうち、わずかひとりしかいなかったという⁽²⁸⁾。図6の男性がそれである。オート＝ガロンヌ生まれで、当時58歳だったこの患者の場合、額の中央部と頭頂前部に強い押圧痕を示す溝がみとれるともいう。おそらくそれは、幼児期になされたヘアバンドや添え木を用いての加工法によるものだろう(図7)。

では、地域社会のなかで、こうした慣行はどの程度みられたのか。これについて、デリスルは前出の学位論文において、ある村——明示はしていないが、トゥールーズ近郊——で悉皆調査を行ったとしている。大雑把な統計でしかないと断っているそれによれば、人口650のこの村で初等学校の男子児童27人



図6 男性の頭蓋変形例 (DELISLE, p. 652)



図7 19世紀の頭蓋加工例 (CRUBÉZY, p. 200)

のうち、変形頭蓋を有するのはわずか2人、ほぼ同数の女子児童の場合は3人だけだったという。だが、15歳から30歳までの年齢層ではその割合は20—25パーセントとなり、女性の方が男性よりはるかに多かったという(実数の明示はない)。さらに30歳から50歳になると、この数値は男性で40パーセント、女性では3分の2にまで増幅し、50歳を超えると、変形頭蓋者はほとんどいなくほとんどみられなくなるとしている⁽²⁹⁾。はたしてデリスルがいつこの調査を行ったかは不明だが、30—50歳代、つまり論文の発表が1880年だったことを考えれば、1830年から50年生まれの人たちを頂点として、年齢が下がるにつれて頭蓋変形が減少していったことになる。50歳以上にそれがまったくみられないのは、変形自体が行われていなかったためなのか。状況的にみてこの点は謎である。

こうした変容がはたして何を意味するのか、残念ながらデリスルの指摘はない。むろん、それが村落社会の「近代化」、つまり衛生や人権、幼児保護といった過程と無縁ではないだろうが、では1830年以前に生まれた50歳代以上の村人に変形頭蓋が認められないのはなぜか。さらに、クリュベジが紹介しているように、南西部エロー県のクレルモンで1914年に生まれた女性に、祖母の手による頭蓋の変形がみられるといった事実をどう考えればいいのか⁽³⁰⁾。謎は依然として氷解しない。それを解く鍵は、おそらく人々の生活そのもの、ありていにいえば民衆文化のうちに求めなければならないだろう。

4. 民衆文化としての頭蓋変形

「フランス助産師の母」ル・ブルシエ・デュ・クードレ、通称マダム・デュ・クードレ（1712–92）は、フランス初の巡回産科学教授で、1759年、ルイ15世から全土での妊産婦の意識向上を託され、母胎と胎児の人工模型をつくったことでも知られる。医学部が助産師の育成にほとんど関心を寄せなかった時代、彼女は全国を回っておぞましい出産風景を幾度となく目の当たりにし、そうした悪弊を改善しようと、1759年、『分娩術概説』を編んでいる。そのなかで、生まれたばかりの我が子の頭が、しばしば出産に伴ってできた瘤のために幾分なりと変形しているのを案じた母親が、「産婆たち」に新生児の頭を作り替えるよう求める風を次のように批判している⁽³¹⁾。

生まれたばかりの子供はなおも柔らかな蠟のようなものであり、自分の思い通りに作り変えることができる。そこで乳幼児の欠点を直すよう依頼された産婆が、その頭部に手を加えてより丸く、鼻をより小さく感じよくする。（・・・）こうした操作がどれほど暴力的なものであるかは、想像に固くない。私はこの変形のあと、数日しか生きられなかったり、一生障害を負ったり、あまりにも鼻の骨が狭まって、呼吸ができなくなった子供を何人も目の当たりにしている。

助産師はフランス革命とともに教会の桎梏から解放され、産科医と同等の力を有するようになり、やがてもっぱら外科医の下で活動するようになった。雄弁をもって第1次世界大戦に反対し、狂信的な国家主義者に暗殺された社会主義者ジャン・ジョレスと同じ、ピレネー地方カストル出身の外科医ジャン＝フランソワ・イカールもまた、同時代のデュ・クードレ同様、頭蓋変形を行う産婆たちが、新生児の頭部を縛って、「自分のファンタジーに見合った形に捏ね上げている」と難じ、さらにこう弾劾している⁽³²⁾。

近年その藁薙き家や惨めな小邑から出てきた多くの女性村人たちが、理論も原理もなく、助産術の難しさもまるで弁えぬまま、不幸なことに一般を相手に、なかには外科のうちでもっとも複雑かつ根本的な部位まで手がけている。

まさにこれは正式な鑑札なり免許をもたぬ者たちによる危うい医術、つまりシャルラタニズムに属する⁽³³⁾。イカールは啓蒙時代における農村部のこうしたシャルラタニズムに抗するため、司教区からの資金援助を得て助産術を教えるようになったという⁽³⁴⁾。

少なくとも18世紀以降、医師や知識人たちはフランス各地で頭蓋変形を再三再四批判・告発してきた。にもかかわらず、この慣習を根絶やしにすることができなかった。事実、民俗学者のロベール・ジャルビによれば、現在もなお刊行されているフランス最古の郷土誌のひとつである《タルン誌》の1878年版に、「トゥールーズ型変形」と題したルイ・シャペールの以下のような一文があるという⁽³⁵⁾。

新生児の頭部をベルトできつく縛り付けるという呪わしい習俗があり、結果はおぞましいものである。（・・・）この種の変形は頭蓋変形と呼ばれており、トゥールーズ周辺やカルカソンヌ、ナルボンヌ、そしてとくにカストルやモンターニュ・ノワール（ブルターニュ半島西南部）にかなりみられる（括弧内蔵持）。

特定の地名を明示しないいささか大雑把な記述だが、それを留保していえば、当時は頭蓋変形がフランス南西部のみならず、北西部のブルターニュまで広まっていたことになる。そこからは慣行自体が衰退している気配は感じ取れない。さらに1902年には、パリの医師がアルビ出身の同僚に変形頭蓋を確認しているという。19世紀後葉の生まれと思われるこの同僚は、皮肉にも頭蓋の変形を一掃することに半生を捧げてきた医師の息子だった⁽³⁶⁾。しかも1940年代（！）になってすら、タルン県のマチューという医師は、祖母が生まれたばかりの孫を外気から守る帽子をかぶせるため、その小さな頭部を変形させていると報告しているのだ⁽³⁷⁾。伝統の根強さ。一言でいえばそうなるだろう。まさにそこには伝統知と近代知との角逐が如実にみてとれる。では、この伝統知を支えてきたものとは何か。いみじくもブロカは「人為的な頭蓋変形は無償の施術ではない」としているが⁽³⁸⁾、はたしてこの人為的な変形は、多くの医師や知識人たちが、脳と頭蓋の発達にさまざまな悪影響を及ぼすとして非難してやまなかった、古

代からの「蛮風」でしかなかったのか⁽³⁹⁾。この疑問はそのまま頭蓋変形の目的を問うことにつながる。

さまざまな論及をまとめていえば、一種の作業仮説として、この慣行の目的は、一部助産師たちのシャルラタニズムを除いて、おそらく以下のように大別できるだろう。

1. ステータス・シンボル
2. 審美観
3. 実用性
4. 払禍・治療法
5. その他



図8 トゥールーズ型頭蓋。パリ自然史博物館蔵（蔵持撮影）

まず、1のステータス・シンボルは歴史的な位相にかかわる。すなわち、制圧された先住民が、移動してきた制圧民（フン族など）の習俗を強制的ないし自発的にとりいれたとする説である。さしたる証拠があるわけではないが、この説はとくにフランスをはじめとする西欧社会で、頭蓋変形がなぜ始まったかを説明するだろう。たとえばデリスルは、ヒポクラテスの説（前出）を参照しながら、頭蓋変形の文化を有する支配者の貴族階層が、その被支配民たちと差別化するために、子供たちにそれを行ったとするのだ⁽⁴⁰⁾。だが、たとえそうだとした場合、この説はフランスやヨーロッパにおける頭蓋変形の起源を語っているだけで、なぜそれが20世紀まで受け継がれてきたかを説くわけではない。

2の審美性についていえば、前述したように、たしかに長頭を美しいとする古代の証言はある。アルビの医師クーテルもまた1809年に、「こうした頭部の人工的な形状が、いわゆる尻軽な女工たちのあいだではとくに美しいとされていたようだ」と記している⁽⁴¹⁾。とはいえ、当然のことながら、こうした

審美的な感性がアルビおよびその周域と、19世紀初頭という時代を越えてどこまで一般化できるかどうかはわからない。この説の最大の弱点は、仮にそうした審美観があったなら、民衆画をはじめとする造形表現に変形頭蓋が称揚されるものとしてしばしば登場するはずなのに、それがみられない点にある。少なくとも筆者は寡聞にしてその作例を知らない。

これに対し、3はより妥当性のありそうな目的といえる。幼児を寒さから守る被り物との関係から説明するもので、たしかに後頭部を長くすれば、幼児の小さな頭部を縁なし帽で帽でしっかり固定・保護することができる。頭蓋変形が圧倒的に女児に、そしてときに男児に対してなされていた事実とも符合する。だが、この説も問題なしとしない。頭蓋変形とは無縁の幼児もまた、同様に頭部を保護する被り物をかぶっているからである。そこにはあえて頭蓋を変形させる必要性が認められない。ちなみに、解剖医で形質人類学者でもあった吉岡郁夫は、その著『身体の文化人類学』で、前頭部変工が西欧ではセーヌとオワーズ両河川のあいだのパリ北方地区に限られ、大部分は女性に対して行われていたとし、「ヨーロッパでは、てんかんや痴呆の治療として、（頭骨の）温熱的あるいは科学的焼灼が行われたことが、医学的記録から知られている」⁽⁴²⁾としている。残念ながら「医学的記録」の紹介はないが、あるいはそうした民間医療が営まれていたかもしれない。



図9 縁なし帽（フランス南西部）

4の払禍・予防説もまた繰り返し言及されている。それはしばしば古老、とくに老女たちの証言に基づいており、頭蓋変形が髄膜炎などの疾病や、幼児ゆえに起きるさまざまな事故を未然に防ぐ役割を帯びているのだという⁽⁴³⁾。この役割は3のそれとも関連するが、これもまた一種の民間医療ないし経験医学に基づくものといえる。むろん、頭蓋の変形がな

ぜそうした効力を帯びているとするのか、その根拠は伝承以外に見当たらない。

一方、5については、いささか意外なことだが、ウィーン出身の建築家・建築史家として知られるバーナード・ルドルフスキーの次のような言及がある⁽⁴⁴⁾。

頭のかたちを細長くするのがいいという考えは、いろいろな民族に広がっていた。たとえば、古代エジプト人がそうであり、アメリカのインディアンがそうであり、またフランスの地方人がそうである。フランスのある地方では、子供の頭をしぼるという習慣が前世紀（20世紀）までなおも守られていたのである。この国は、女性のための優美の理想をうちたててことで知られているが、（・・・）この種の頭の変容の動機は美的なものではなくてむしろ優生学的なものであった。（・・・）人びとは、子供の将来のあり方は文字通り頭脳のかたちを整えることで指導されねばならぬと思っていたのである。たとえば、ジョゼ神父というイエズス会士は、母親たちに、もし彼女らの子供たちを偉大な雄弁家にしたてようと思うならば、生まれたての赤ん坊の頭に手をくわえねばならぬと忠告したのであった（括弧内蔵持）。

改めて指摘するまでもなく、頭蓋変形と雄弁家を結びつける根拠は、その出典同様不明である。「フランスのある地方」がどこなのかの明示もない。一笑に付すつもりは毛頭ないが、これもまたシャルラタニズムに類するエピソードといわざるをえない。何よりもルドルフスキーはジョゼ神父についてほとんど何も知っていなかった。この神父はじつはペトリュス（ペトルス）・ジョセのことであり、前記リモージュの寄宿学校の教授で、1650年、ラテン語による『修辞学』を著している。彼についてはジャン・アンビアレの医学博士学位論文⁽⁴⁵⁾やデリスルに紹介があるが、後者によれば、骨相学や頭蓋観察の先駆者だったジョゼ神父は、知的能力の発達を法則化するため、それを司る脳の拡大を優先的に考えたという⁽⁴⁶⁾。こうして彼は頭蓋変形によって後頭部をより長くすれば、それだけ記憶を蓄積する場が増えると提唱したのである。どことなく前述した第3帝国の人種的発想を想起させるが、こうした彼の提

唱は強大なイエズス会の聖職者や学者たち、さらにリモージュ地方やその隣接地域に広く受け入れられたのだった。そのかぎりにおいて、ジョゼ神父は頭蓋変形を推奨した数少ない知識人だったことになる。

以上、フランスにおける頭蓋変形の目的を縷々検討してきたが、そこで明らかになったのは、以下のように集約できるだろう。

1. おそらく医聖ヒポクラテスの著作に初出する変形頭蓋（長頭）自体は、いったいにアッカルチュレーション、すなわち民族移動——フン族やキンメル人など——と結びつけられ、ときに貴族的なステータス・シンボルとみなされてきたが、バスク地方など地域によってはそれ以前からみられた。
2. とくに19世紀中葉以降、変形頭蓋の研究は、墓地からの出土遺骨や精神科病院患者の頭骨に学問的な関心を示した形質人類学者たちの分析によって著しく発展した。だが、その研究の多くはフランス南西部など特定の地域住民の頭蓋に基づくものであり、フランス人の民族的出自や時代的・地域的な偏差を説明しようとするものであり、民衆生活のなかでそれがいかなる意味を帯びていたのかに関する考察はほぼ皆無である。
3. 形質人類学が明らかにしたように、一連の頭蓋変形例は男性よりも女性に圧倒的に多い。だが、それが何を意味するかを示す積極的なデータは見当たらない。
4. この慣行は医師や知識人たちからしばしば俗信的・非科学的な蛮風として非難されてきたが、これらの非難は近代的な価値観や衛生観によるものであり、そこではなぜそれが存続したかについて、つまり民衆文化におけるその意味までは考察されていない。
5. きわめて面妖なことに、こうして社会的に指弾を浴びながら、頭蓋変形を禁ずる法令が一度も出されていない。この事実は、行政当局や教会という権威の中核が、慣行を黙認していたとも受け取れる。

では、こうした研究史の瑕疵を埋めるためには、いかなる視座が求められるのだろうか。それにはやはり人々の生活そのものに目を向けなければならないだろう。

おわりに代えて——頭蓋変形のイマジネール

フランス民俗学には妊産婦や出産、乳幼児・幼児についての膨大な資料や研究の蓄積があるが、その代表的な著作としては、名著『通過儀礼』でつとに知られるA・ヴァン・ジェネップ (1873-1957) の膨大な『現代フランス民俗入門』がある。フランス全土の民俗文化を網羅する予定だったはずのこの大著は、残念ながら未完のまま終わった。しかし、「揺籃から墓場まで」の民俗を扱ったその第1部第1巻において、この頭蓋変形を含む新生児のかかわる民俗についてこう述べている⁽⁴⁷⁾。

はじめての入浴や産着の着装、頭骨の変工、さらに一般的に行われている血液循環を活性化させるための全身マッサージは、通常、(新生児の)ひとりないしふたりの祖母が見守るなかで、助産師あるいは老婆の特権に属している。さまざまな著者たちはその詳細を論じているが、それが明らかにしているところによれば、誕生から洗礼式までのあいだ、子供は極端なまでに有害な影響をこうむるとはいえ、そこでは実践医術が呪術を凌駕しているという。

この一文からすれば、フランス民俗学を大成させたひとりであるヴァン・ジェネップにとって、乳幼児への頭蓋変形は(母親との皮膚共生を断ち切る)入浴や(身体をきつく縛り付けるような)産着の着装、さらにマッサージと同様の措置であった。おそらく彼は、それが地域的かつ伝統的な身体観に依拠する母親の配慮であって、けっして無知蒙昧ゆえの呪術などではない。むしろ誕生直後の乳幼児の危うい身体を矯正・保護する、一種の実践医術だというのだ。たしかに危険は伴うとしても、それ以外に何が乳幼児を守ってくれるのか。素朴な不安を解消するには、ほかに何があるのか。そこには「他者」の眼差しからはつねに非難の対象となるが、過不足なく地域的なイマジネール(集団的想像力)が働いている。

同様に、現代のフランス民族学者であるフランソワズ・ルークスも、身体加工をイマジネールから論じている⁽⁴⁸⁾。

人相学が頭や顔の特徴を説くかぎり、人びとが

最初に子供の頭蓋形や鼻翼に関心を抱いたとしても、何ら不思議なことではない。(・・・) 結局のところ、肉体とは、一般大衆の考え方からすれば、ひとつの全体にほかならなかった。すなわち、目に見える一部分の特徴が、隠された部分まで明らかにしてしまうのである。

パラケルススの署名理論を引き合いに出して肉体に換喩的な特性をみるルークスは、たとえばその事例として鼻と性器との関連をとりあげ、伝統的な社会では、肉体は乳幼児の段階から鍛えられ、教化され、社会化されなければならなかったと指摘している。彼女の響に倣っていえば、まさに頭蓋変形とは地域社会における社会化の一過程ということになる。それをしも通過儀礼と呼ぶべきかどうか、確証がないため、にわかには判断できないが、たしかに一部の地域や時代では、この変形が単なる「蛮風」を超えて、社会的な成員となるための手続きとしての重要な意味を帯びていたとも考えられる。つまり、こうした「蛮風」が外部から繰り返し非難されながらも存続してきた理由のひとつがここにあるのではないか。

さらにいえば、現代においてさえ、出産まもない母親たちは、我が子の容貌や健康に常態ならざる不安を抱き、その効果が科学的に何ら立証されない、少なくとも宣伝文句ほどに効能がないような手段ですら、安心感と引き換えに利用している。たとえばいわゆる「絶壁頭」(斜頭症)防止のためのドーナツ枕やモルディング・ヘルメットなどである。それを母親の短慮と誇ることは到底できない。とすれば、こうした現代の配慮と往時の頭蓋変形とのあいだに、いったいどれほどの差があるといえるのか。民俗史家のジャック・ジェリは、『フランス民俗学』誌の所収論文「身体の改造：嬰兒の身体の意図的な変形」において、この慣行の底護的・審美的・象徴的な側面を縷々分析したあとで、次のように指摘している。「(頭蓋)変形の理由がなくなっても、この慣行は伝統や慣習、そして俗信によって維持されてきた。こうした慣行は最終的に第1次世界大戦以前に消滅したが、興味深いことに、それは集団的な無意識によって支えられてきたこの慣行が、やがて嫌悪感を抱かせるようになったかのようなものである」⁽⁴⁹⁾。筆者の用語法では、この集団的無意識とは、まさに個人的

な想像力の謂であるイマジネーションを規制するイマジネールということになるが、おそらくジェリは集団的な無意識がときに人々を慣行に従わせ、ときにこれを廃止させるというメカニズムを内包している点に気づいている。だが、残念ながら「嫌悪感を抱かせるようになった」のかという肝心な点に関する指摘はない。もとよりこの変化はついに「伝統知」を超克した「近代知」によるイマジネールの変容に起因するのだろうが、たとえば前記ヴァン・ジェネップの名著に紹介されているように、1910年代を過ぎてもなお、フランスの一部、たとえばいち早く近代化を遂げた首都圏のイル＝ド＝フランス地域で頭蓋変形が行われていたという事実をどう考えればよいのか。

歴史を語るにはつねに作法がある。対象そのものに限りなく接近する眼差しと、対象の周域ないし深層へと向かう眼差しを往還させるという作法である。この遠近法によってしかじかの歴史的事象と向き合えば、しばしば定説の危うさがみえてくる。表裏や正負が逆転することもある。歴史の諧謔とはひとえにこうした反転のメカニズムに起因する⁽⁵⁰⁾。遠くから見れば蛮風として指弾された頭蓋変形も、近くに寄れば、我が子の行く末を切望するいつに変わらぬ母親のひたむきな想いと吐息とが感じられる。ここでは歪像が正像へと過たず反転する。イマジネールに規制されながら、精一杯のイマジネーションでそれに抗しようとする。頭蓋変形が時代のイマジネールで断罪されながらも存続した背景には、禁令の対象にならなかったことに加えて、おそらくそうした生への意識があったはずだ。イマジネールが規制力を帯びているかぎりにおいて公的な文化の基盤であることはいうまでもないが、民衆は自らのぎりぎりの生を賭してそれを突き抜ける。まさにこれこそが学問的な了解をはるかに凌駕する私的な文化、すなわち民衆文化のありようといえるのかもしれない。

註（下線部は論文を示す）

1. Rose SOLECKI et als. : Artificial cranial deformation in the Proto-neolithic and Neolithic Near East and its possible origin. Evidence from four sites, in Paléorient, vol. 18, no. 2, 1992, pp. 83-97.
2. 形質人類学者のアンドレ・ランガネによれば、中央アジアでは1世紀の遺骸にその変形例がみられるという (André LANGANEY : *Les Hommes. Présent, passé, conditionnel*, Arman Colin, Paris, 1988, pp. 157-158)。だが、目的についての指摘はない。
3. ヒポクラテス『古い医術について』、小川政恭訳、岩波文庫、1992年、25頁。
4. ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌 II』、飯尾都人訳、龍溪書舎、1994年、75頁。ここでストラボンは「長頭人」を意味するマクロセファロイ ($\mu\alpha\kappa\rho\sigma\kappa\varepsilon\phi\alpha\lambdaοι$) という語を用いている。ちなみに、ヘロドトスはこのシギンノイ (シギュンナイ) 族をトラキア地方の北方からアドリア海付近に住む民族としているが、頭骨に関する記載はない (『歴史 中』松平千秋訳、岩波文庫、137頁)。
5. Jaroslav JIRIK : *Bohemian Barbarians. Bohemia in Latin Antiquity*, Brepols, Tuenhoust, 2011, p. 286.
6. http://fr.wikipedia.org/wiki/D%C3%A9formation_volontaire_du_cr%C3%A2ne
7. Communiqué de presse, 24 octobre 2013, INRAP.
8. トマス・クローウェル著、蔵持不三也訳「図説 蛮族の歴史・世界史を変えた侵略者たち」、第2・第3章、原書房、2009年。
9. Amédée THIERRY : Episode de l'histoire du Ve siècle ; Attila, les Huns et le monde barbare, in Revue des Deux-Mondes, 1851, p. 526, note.
10. Fernand DELISLE : *Contribution à l'Étude des déformations artificielles du crâne*, Imp. de la Faculté de Médecine, Paris, 1880, p.13.
11. Marcel BAUDOUIN : *Description anatomique des neufs crânes de la station gallo-romaine des Chiumes en Saint-Hilaire-de-Riez (Vendée)*, in Bulletin et Mémoires de

- la Société d' Anthropologie de Paris, V^e série, t. 3, fasc. 6, 1912, pp. 321-345.
12. Bruno MAUREILLE et als. : Le crâne déformés de Saint-Etienne, Belletins et Mémoires d' Anthropologie de Paris, Nlle. Série, t. 7, fasc. 1-2, 1955, pp. 65.
13. Eric CRUBÉZY : Merovingian skull deformations in the southwest of France, in D. AUSTIN & Leslie ALCOCK, ed. : *From the Baltic to the Black Sea*, Unwin Hyman, London, 1990, p. 190.
14. Ibid., pp. 191-192.
15. この書に関する詳細は、たとえばSebastiano BISSON et als. : Le témoin gênant. Une version latine du Régime du corps d' Aldebrandin de Sienne, in *Médiévales*, no. 42, 2002, pp. 117-130 を参照されたい。
16. 詳細は拙著『シャルラタン—歴史と諧謔の仕掛け人たち』、新評論、2003年、376—378頁参照。
17. ALDEBRANDIN DE SIENNE : *Le régime du corps*, éd. par Louis LANDOUZY & Roger PÉPIN, H. Champion, Paris, 1911, p. 75.
18. 『ホメーロスの諸神讃歌』にも、兄弟である冥府の神ハデスに娘ペルセフォネ（ペルセポネ、コレ）母神デメテルが、身分を明かさぬまま、エレウシスに赴き、ケレオス王の幼子デモポン（デモフォン）の乳母となり、火を用いてケレオスの息子デモポンを不老不死にしようとしたが、その秘法をケレオスの妻メタネイラに見咎められ、憤った母神はそこで正体を現したとある（『ホメーロスの諸神讃歌』、杵掛良彦訳、ちくま学芸文庫、2004年、33頁）。神話ではあるが、この話は、古代ギリシアにおいても、乳児にとって乳母がいかに重要な存在であったかを示す事例といえるだろう。
19. Jeles César SCALIGER : *Commentaire de Théophraste, d' après Louis-André GOSSE : Essai sur les déformations artificielles du crâne*, cap. IX, J.-B. Baillière, Paris, 1855, p. 13.
20. コルシカ島のエンブレムが「ムーア人の顔」となっていることに関する詳細は、拙論「表象論Ⅰ——コルシカ島の《ムーア人の顔》」、蔵持ほか編『神話・象徴・イメージ』、原書房、2003年、17—50頁を参照されたい。
21. DELISLE, op.cit., p. 14.
22. Ibid.
23. エッフェル塔にその名が刻まれ、パリの通りや生地（フランス南西部ジロンド県サント＝フォワ＝ラ＝グランド）のリセ、ボルドー大学医学部などの名祖となり、さらに終身元老院議員に選ばれ、記念切手にもなったことがあるブロカの詳細な業績については、たとえば以下を参照されたい。Pierre HUARD : Paul Broca (1824-1880), avec une bibliographie des travaux de Broca par Samuel Pozzi (1846-1918), in *Revue d' Histoire des Sciences et de leurs applications*, 1961, t. 14, no. 1, pp. 47-86.
24. Paul BROCA : Sur la déformation toulousaine du crâne, in *Bulletins de la Société d' Anthropologie de Paris*, IIe série, t. 6, 1871, pp. 100-131.
25. Ibid., pp. 100・107.
26. Ibid., p. 102.
27. BROCA : Crâne et cerveau d' un homme atteint de la déformation toulousaine, in *Bulletins de la Société d' Anthropologie de Paris*, IIIe série, t. 2, 1879, p. 418.
28. DELISLE : Sur les déformations artificielles du crâne dans les Deux-Sèvres et la Haute-Garonne, in *Bulletins de la Société d' Anthropologie de Paris*, IIIe série, t. 12, 1889, p. 650。デリスルはまたこの論文において、磁器で有名なフランス中南部オート＝ヴィエンヌ県のリモージュにある精神科病院の入院患者の頭骨を調べ、その結果も報告している。それによれば、同県出身の男性141人のうち18人（12.77%）、女性146人のうち33人（22.67%）、フランス中部クルーズ県出身の男性76人のうち10人（13.16%）、女性49人のうち14人（28.57%）、さらに中央山地北側のアンドル県出身の男性62人のうち4人（6.45%）、女性61人のうち6人（9.83%）が、それぞれ変形頭蓋の持ち主だったという。
29. DELISLE : *Contribution à l' étude des déformation artificielle du crâne*, Imp. De la Faculté de Médecine de Paris, 1880, p. 65.なお、パリ大学医学部に提出されたこの学位論文の

- 主査はポール・ブロカである。
30. CRUBÉZY, op. cit., p. 192
 31. LE BOURSIE DU COUDRAY : *Abrégé de l'art des accouchemens*, Vve. Delaquette, Paris, 1785, pp. 13-14. (d'après Jacques GÉLIS : *Sages-femmes et accoucheurs. L'obstétrique populaire aux XVIIe et XVIIIe siècles*, in *Annales. E.S.C.*, 32e année, no. 5, 1977, p. 951.). なお、デュ・クードレに関する詳細は、たとえば Nina Rattner Gelbart : *The King's Midwife. A history and Mystery of Madame Du Coudray*, Univ. Of California Presse, Berkeley, 1998などを参照されたい。
 32. Jean-François ICART : *Leçons pratiques sur l'art des accouchemens*, Chez l'auteur, Castres, 1784, p. 169
 33. シャルラタニズムについては、『シャルラタン』(前掲)を参照されたい。
 34. Maecel BIENFAIT et als. : *Tarn. Aux couleurs de l'Occitanie*, Éds. Bonneton, Paris, 1988, p. 74
 35. Robert JALBY : *Le folklore du Languedoc*, G.-P. Maisonneuve, Paris, 1971, p. 17.
 36. BIENFAIT, op.cit., . p. 75.
 37. Ibid.
 38. BROCA : *Crâne et cerveau d'un homme atteint de la déformation toulousaine*, in *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, III^e série, t. 2, 1879, p. 410.
 39. Frédéric FALKENBURGER : *Recherches anthropologiques sur la déformation artificielle du crâne*, in *Journal de la Société des Américanistes*, t. 30, no. 1, 1938, p. 35.
 40. DELISLE . *Les macrocéphales*, in *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, Ve série, t. 3, 1902, p. 28.
 41. Dr. COUTELE : *Observations sur la constitution médicale de l'année 1808 à Albi*, Baurens et Collason, Albi, 1809, p. 90.
 42. 吉岡郁夫『身体の文化人類学』、雄山閣、1989年、10頁。
 43. BIENFAIT, op.cit., p. 76.
 44. バーナード・ルドルフスキー『みつともない身体』、加藤秀俊・多田道太郎訳、鹿島出版会、1979/99年、122頁。
 45. Jean AMBIALET : *La déformation artificielle de la tête dans la région toulousaine*, Thèse Médecine, Univ. de Toulouse, 1893.
 46. DELISLE : *Les déformations artificielles du crâne en France. Carte de leur distribution*, in *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, Ve Série, t. 3, 1902, p. 128.
 47. A. Van GENNEP : *Manuel de folklore français contemporain*, t. 1-1, Picard, Paris, 1943 / 82, p. 122.
 48. フランソワズ・ルークス『肉体——伝統社会における慣習と知恵』、蔵持・信部保隆訳、マルジュ社、1983年、70頁。なお、イマジネールについては、嶋内博愛・出口雅敏・村田敦郎編著『エコ・イマジネール——文化の生態系と人類学的眺望』、言叢社、2007年所収の拙論「文化の見方に関する試論」(6—28頁)を参照されたい。
 49. GÉLIS : *Refaire le corps. Les déformations volontaires du corps de l'enfant à la naissance*, in *Ethnologie française*, Nlle. Série, t. 14, no. 1, 1984, p. 28.
 50. こうした歴史の見方については、拙著『ペストの文化誌』(朝日新聞社、1995年)や『シャルラタン』(前掲)および『英雄の表徴』(新評論、2011年)などを参照されたい。
- 追記 本研究は九州大学名誉教授中橋孝博氏のご示唆を受けてなされたものである。同氏に深甚なる謝意を捧げたい。なお、本稿は科研費研究助成(基盤C・課題番号24520844)の成果の一部である。